

「神の眼」はエスノグラフィーを解放するのか —ショッピングリハビリにおける身体・道具・言語—

岡田 光弘

成城大学非常勤講師

okada@emca.net

Can Technological Assisted “God’s Eye” Emancipate Ethnography: Body, Tool and Language with “Rakuraku Cart”

OKADA Mitsuhiro

Seijo University

Keywords: Video-Ethnography, Third-person Phenomenology, Volumetric

要旨

ショッピングリハビリ事業に使われている、歩行器とショッピングカートの機能を持つ「楽々カート」を利用する高齢者を対象に、多視点・全方位 360 度ビデオカメラという新しい撮影機材を用いてフィールドワークすることに「ついて」考察を行った。

(オート) エスノグラフィー、現象学、当事者研究といった一人称的研究について整理し、新たなテクノロジーがそれらの記録や記述に与える影響について検討した。

カートによる「歩行」や（化粧品の）買い物の映像を提示することで、360 度ビデオカメラで日常生活者の活動がその都度、達成されている様子をビデオ・エスノグラフィーすることでえられる研究方法論上の示唆を明らかにした。

「三人称的な動的視点」からの新しい映像テクノロジーの利用によって「一人称」を「三人称」化することは、「主体」と「客体」や「体験」と「研究による客観化」という従来の対立を乗り越える可能性を示している。それは、エスノメソドロジーによるエスノグラフィーの研究手順が「体験をそのまま研究するという」というハイデガーの希望を現実のものにするということでもある。

1 はじめに

本稿では、多視点・全方位 360 度 (volumetric) ビデオカメラを用いて行うフィールドワークと記述に「ついて」の考察を行う。研究自体は、地域の資源を活用してリハビリの新しい形を提供すること、具体的には地域おこしや健康増進といった様々な価値の実現が期

待できる「ショッピングリハビリ」事業で使われている、歩行器とショッピングカートの機能を持つ「楽々カート」を利用する高齢者を対象にしたフィールドワークであった。本稿は、これまでの視点固定的（cinematic）ビデオカメラに代わって、360度ビデオカメラという新しい撮影機材を用いてフィールドワークをすることに「ついて」の考察である。

2節では、360度ビデオカメラによって可能となったフィールドの映像を提示しながら研究の概略を示し、3節においては、図式的な理解の水準にとどまるものの、（オート）エスノグラフィー、現象学、当事者研究といった一人称的研究について整理し、新たなテクノロジーがエスノグラフィーの記録や記述に与える影響について検討する。続く4節では、（化粧品）の買い物や化粧、またカートによる移動の映像を提示することで、日常生活者の活動を360度ビデオカメラを用いてビデオ・グラフィーすることでえられるデータの社会的な意義を明らかにする。2方向の映像を切り出して分析を行った諸研究（堀田2025; 加戸2025）とともに、フィールドワークにおいて「三人称的な動的視点」を可能にする多視点・全方位360度映像を利用することで手に入る研究方法上の利点についても考察する。

2 調査の概要（多視点・全方位360度ビデオカメラを用いたエスノグラフィー）

2.1 「ショッピングリハビリ」

高齢者が商業施設においてサポートを受けながら「買い物」を「リハビリ」として行う試みとして「ショッピングリハビリ」がある。ショッピングリハビリは、まず「リハビリ」として高齢者の身体機能の維持・向上を目指す、またそれは、地域の資源を活用して高齢者に「買い物の楽しさ」や「化粧の喜び」といった生きがいをもたらすことを目指す。さらには、商品購入の機会を増やすことで、地域経済の活性化も視野に入れている活動である。利用者の一部は、のちに示すような「楽々カート」と呼ばれる特別な道具を使用している（加戸2025）。

2.2 当日の調査の概要

調査は2023年（山陰地方）と2024年（中部地方）に、ショッピングリハビリを導入している商業施設で行なわれたものである。楽々カートを使用し買い物をする利用者と自治体や店舗からサポートを行うスタッフの協力により、化粧品や衣服など買い物の様子を撮影した。

撮影に使用したのは、多視点・全方位（volumetric）の映像データが利用可能な360度ビデオカメラ（insta360 X3）と移動に伴う撮影が可能だが視点固有（cinematic）のメガネ型カメラ（Ordoro EP8）である。本稿で中心的に扱われる360度ビデオカメラは、カートの把持部に取り付けた。メガネ型カメラは、対象者、付き添った調査者、巡回するスタッフが装着し、本人の目線からの映像を撮影した（加戸2025; 真鍋2025）。

2.3 360度ビデオカメラによる映像

今回のフィールドワークでは主に360度ビデオカメラを利用した。このカメラを利用すれば、対象者の前方・後方・側方を一気に撮ることができる。視点の移動によって、空間と時間という観点で生き生きとした分厚さを持ち、一人称的な視点の限界を超えた「場」の構成や臨場感を捉えることができる「三人称的な動的視点」からの映像が手に入る（McIlvenny & Davidson 2023: 222）。使用機材の概要については、本号に掲載されている真鍋（2025）、取り回しについては加戸（2025）を参照していただきたい。

この機材の利点としては、撮影後に視点を移動することができ、それにより多視点から、ほぼ全方向を収めることができることである。この360度ビデオカメラでは、インフォーマントに撮影を意識されにくい配置の映像が手に入る。また十分にコンパクトであることから移動時には、対象者のカート使用の様子、スタッフや調査者との相互行為を対象者の移動を妨げない自然な形で撮影することが可能である。いずれの場合も、撮影後に、撮影者が撮影時には目にしていない視点からのものを含めて複数の「三人称的な動的視点」から映像の確認や切り出しが可能になっている。

こうした機材を用いた映像データから、本調査には、以下で示すように、「（場」の参与者として）調査に共材した複数の主体の眼があり、さらにそれらを映像として固定し、のちに利用することを可能にする複数のカメラが存在していたことが確認できる。

三つの視点

- | | | |
|-------------------|---------------|-------|
| 1) 学的エスノグラファー1, 2 | F・M（フィールドノーツ） | 図4で提示 |
| 学的エスノグラファー3 | X（360度ビデオカメラ） | |
| 2) 組織エスノグラファー1 | Y（カメラマン） | |
| 組織エスノグラファー2, 3 | Z（店員） | |
| 3) インフォーマント | W（日常生活者） | 図4で提示 |



図1 多視点・全方位360度ビデオカメラを利用した画像（三つの視点と四つのカメラ）。

つうじょう意識されているのは、フィールドワーカー（F と M）がインフォーマント（W）を記述する学的な三人称の視点 1），そして生き生きとした経験の当事者である W の一人称の視点 3）の二つだろう。だが、図 1 に見られるように 360 度ビデオカメラを利用した画像には、別の視点も記録されている。この画像には、店舗でのイベントを記録する「店員（Z）」の視点と自治体も関与した公的なイベントの「記録係」であるカメラマン（Y）の視点も映り込んでいる。三つのカメラ（厳密には、フィールドワーカーは EP8 という視点カメラも装着しているので四つ）がそれぞれの経験を固定し、それぞれの記録に利用されているということである。この場のカメラマンは、自治体の主催するイベントの公式記録に載せる写真を撮影しており、店員は、店舗の組織として説明責任を果たすために、業務の一環として映像記録をとっている。このようにテクノロジーを介して、マッハ的な「一人称」の視点（図 2 を参照のこと）の難点が物理的に克服され「一人称」を繰り込んで、その「内的地平」（Schutz 1962=1983: 186）を可視的なものにすることで「三人称」化されている。

純粋に学的な関心に基づいた形態以外のフィールドワークについてマーネンは「雇われ労働者物語」や「金目当てのフィールドワーク」（Van Maanen 1988=1999: 241f）と呼ぶ。彼が「寄生虫」（Van Maanen 1988=1999: 77）と呼ぶあり方には、利点も存在する。その一つは、この調査のようにイベントに組み込まれることでインフォーマントのふるまいの自然性が担保されることということである。図 1 にあるように、腕章をつけたカメラマン、ネームプレートをつけた店員の存在は、倫理的な配慮から腕章をつけて調査する学的なフィールドワーカーたちの違和感を薄めていると期待できる。

一人称の視点を越えるテクノロジーによる記録とそれに基づいた記述は、人々が、社会生活を営むために利用していて、エスノメソドロジーによるエスノグラフィーの対象となる「観察可能な秩序」（Garfinkel 2002; Livingston 2008）の姿を露わにし、以下のようにガーフィンケルが「場」と呼んだ「分厚い」対象の記述を可能にしてくれるかもしれない。多視点での記録が可能な 360 度ビデオカメラは、個人の「体験」や「意図」に基づく記述ではなく、身体的な行為による「達成」の「場」を記録する。「ガーフィンケルの言う場とは、生き生きとした空間と時間の分厚さ中にある、身体的な行為の場である。それは、モノで満ちており、まさにそれ自体が相互主観的であり、言葉の中にあり、他者に住まわれている」（Eisenmann & Lynch 2021: 14）。以下のように 360 度ビデオカメラを採用することで、一人称視点の限界が克服され、物理的に「場」の全体を見渡らせるという「オブジェクト中心モバイル・エスノグラフィー」（真鍋 2025）は視野の拡散ではなく、そこで社会的に「達成」されている活動について視野の複数化をもたらし、視覚中心主義と強く結びついた「主体」や「能動」性、また「意図」といった概念からの解放に資するかもしれない。

ここでいう「場」とは、言うならば、道具や他者との共存において、「次に何をすべきか」（Garfinkel 1967=2025）を教えてくれる、言語を含めたコミュニケーションの資源の

総体である。「場とは何か？それは言語が語られ・思考が紡ぎ出されているその現実そのもの・すなわち、社会であり歴史に他ならない。「人間の能力」「文化の一般的条件」「社会の組織体制」と結びついたその場をフィールドとして、言語は思考の可能性に作用する（國分 2017: 112）。

現象学を含む哲学において、一人称の視界に限界づけられた当事者としての「主体」と客観性を根拠づける「客体」という対比は、その共有前提である。「人間は他者と共に生きている限り、常に、自分自身によって体験を内側から理解するか、あるいは、他者によって体験を外側から説明されるか、といった二つの可能性の中で生きている」（池田 2013: 125f）という主体と客体の二元論は、広く研究の暗黙の前提となっている。

多視点によって「場」の複雑性を固定し、視覚中心主義の限界の外で対象を研究を進めることを可能にする可能性を開く 360 度ビデオカメラの出現は「主体」と「客体」や「能動」と「受動」といった二元論を乗り越えるためのデータをもたらしてくれるかもしれない。

3 ビデオ・エスノグラフィー

3.1 様々なエスノグラフィー

エスノグラフィーは、「他者理解」の方法であり、以下のように「文化」と「文化」をつなぐものとされる。「エスノグラフィーは文化とフィールドワークを結び合わせる。ある意味でエスノグラフィーは、二つの世界、二つの意味体系の間に位置している」（Van Maanen 1988=1999: 24）。それゆえ、マーネンが、ギアツ（1974=1991）の言葉を借りて指摘するフィールドワークの目的とは、単純化して言うなら「現地の人が言うことやすることから、彼が自分は何を知っていると考えているのかを理解すること」（Van Maanen 1988=1999: 44）である。録音・録画というテクノロジーは、そうした理解に資するデータをもたらしてくれたとも言える。

「フィールドワークの成果をテキストに表現する際に用いられる文学的かつ修辭的な装置」（Van Maanen 1988=1999: 213）だとするマーネンは、用いられている文体から、作品としてのエスノグラフィーを形作っている物語を分類している。『フィールドワークの物語』（Van Maanen 1988=1999）における大きな括りとして、「写实的物語」、「告白体の物語」、「印象派の物語」が挙げられている。さらなる分類として、「批判的物語、形式主義的物語、文学的物語、ジョイント形式の物語）である

マーネンの分類においては、ビットナー（Van Maanen 1988=1999: 123）、シュワルツ（Van Maanen 1988=1999: 125）のようなエスノメソドロジーによるエスノグラフィーは写実主義に割り振られるが、ガーフィンケル、シクレル、会話分析は社会的な文脈を軽視した「形式主義」だとされる。エスノメソドロジストの自己理解とは異なって、マーネンにとっては、総じてエスノメソドロジストは、単に「書き手自身を業界内で位置付けるために、難解なジャーゴンを用いている人々」（Van Maanen 1988=1999: 61f）なのである。

エスノグラフィーが「他者理解」のためのものであったことと対照的に、哲学における「現象学」は、一人称的な視点による研究を指していた。それゆえ、一部のエスノメソドロジストが自称する「三人称の現象学」（池谷 2020; 岡田 2020）は、端的に語義矛盾という要素を孕んでいるとされるかもしれない。他者ではなく自己を記述の対象とする「オートエスノグラフィー」という言い回しも同様である。現状、「オートエスノグラフィー」については、原理的な考察は進んでおらず、一人一芸的に「喚起的オートエスノグラフィー」「パフォーマンスオートエスノグラフィー」「批判的オートエスノグラフィー」「共同的オートエスノグラフィー」「対話的オートエスノグラフィー」「分析的オートエスノグラフィー」「アブダクティブオートエスノグラフィー」「熟慮的オートエスノグラフィー」といった名称を与える分類をすることで、その多様性が主張されている。

現象学者である池田は「現象学」からの派生物ではなく、純粋な一人称の記述とも言えない当事者研究が「現象学」となる可能性に言及している。「当事者研究は、障害や困難の当事者による現象学の実践である、と言いたくなるほどある」（池田 2013: 114）としている。だが、これは当事者研究の意義を讃える、一種の希望の表明であり、「主体」の「経験」とそれを他者が客観化する「研究」という「二項対立」を克服しない限り実現する手段を持たない希望でもある。

池田は「ハイデガーは、客観化する理論的なふるまいが『生からの乖離』と表裏一体であるとして、体験に『客観化』ではない仕方アクセスする学問的方法の開発を目指した」（池田 2013: 123f）という。エスノメソドロジーは、「実践的な社会学による理由説明」という聞きなれないジャーゴンを用いて「日常生活者は社会学者である」と主張した奇妙な社会学として知られている（Garfinkel 1967=2025）。実は、この主張こそ、ハイデガーの希望を現実のものにする方法を示すものである。

この点について、まず、多くのフィールドワーカーが共有している事実から考えていきたい。ギアツ（1974=1991）の言葉を借りて、マーネンが指摘するのは「地の人と言うことやすることから、研究対象を理解するためには「研究対象の文化の中にエスノグラファーが存在することを要求している」（Van Maanen 1988=1999: 44）という、全く当たり前のことである。実のところ、2 節で提示したように社会的な「場」というものは重層的に構成されている。では、このエスノグラファーたちが、それぞれにインフォーマントでもある当事者だとしたらどうであろう（Sharrock & Anderson 1980）。すなわち「調査者だけでなく人々も、行為を、絶えず、たがいに見て分かるものにしていくという意味で、フィールドワークに比敵する行為を行っている……人々と調査者は、その立場は違えど、それぞれ、どんな出来事、行為が起こっているのかを発見しなければならない存在なのである」

（岡田 2001: 40）。人々がお互いのために「観察可能な秩序」（Garfinkel 2002; Livingston 2008）を作り出し、その都度、それを資源として社会を組み上げているという見方によって、エスノグラフィーという営みを研究者だけがしている特権的な手続きではなく、日常

的なものだとするなら、ハイデガーの希望が現実のものになるというのがエスノメソロジーが採用した研究の方法なのである。

3.2 エスノグラフィーの困難

前の項で述べたように、「オートエスノグラフィー」が、語義矛盾となるというロジックは、現象学的な記述を目指す研究に原理的な困難を生みだすロジックと同じものである、それは「主体」と「客体」、「能動」と「受動」という根源的な「二項対立」から派生している。オートエスノグラフィーの描く世界は、大まかに、「主体」が「能動」的に考えたり意図したりする世界という在り方とその内側で「主体」が「客体」から被る困難から成り立っている。これは、固定された一人称視点の「私」が外的な世界を見ているという構成である。ここで視点そのものとして表象されている「主体」には「体験」や「意図」が帰属される。そして、この「主体」が進んで「意図」を持ち行うことが「能動」であり、甘んじて受け入れることが「受動」である。

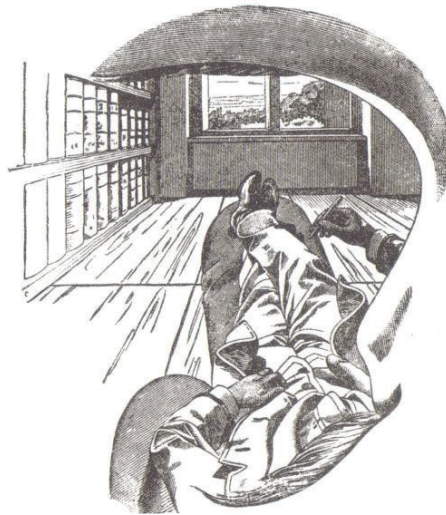


図2 「体験」と「意図」の棲家としての「マッハ的視点」

理念的な考察に従えば「能動と受動という区別については、その外側を想像することすら難しい」（國分 2017: 340）と思われているが、後に具体的なデータで示すように、実際の「場」における「能動」と「受動」は相互嵌入的なものである。またこれは文脈依存的でもある。ここで言う「能動」と「受動」の文脈とは「杖を持って道を歩くときに、杖をゆるく持てば杖の動きは道の凹凸を反映する。この場合は客体に属する。しかし杖を強く持てば、それは主体のほうの動きを反映している」（斎藤 2024: 150）といったことである。國分によれば、「デリダはこんなふうに述べている。おそらく哲学は、……ある種の

非一他動詞性をまず能動態と受動態へと振り分け、それを抑圧することで自らを構成したのである」（國分 2017: 120）ということになる。また、研究における「主体」と「客体」、「体験」と「客観化」との関係について、現象学者である池田は、「科学者という第三者が私の体験を客観化して研究する場合には、この体験が私に現実存在していることは最終的に「そう信じる」という域を出ない。どれだけ観察や聞き取りを重ねても、結局、その体験をしているのは研究者・専門家自身ではないという単純な事実は消えないからだ」（池田 2013: 122f）として、「二項対立」の根源性ゆえに、一人称的な経験を学的に記述することが原理的に、大きな困難を抱えていることを隠さない。

池田は「フッサールやハイデガーは、ある研究が真に科学的である基準として『生の現実から乖離しないこと』が立てられるべきだと——実に単刀直入に——主張した」（池田 2013: 123）とし、すでに述べたように、ハイデガーが「客観化」する理論的なふるまいが「生からの乖離」と表裏一体であるとして、体験に「客観化」ではない仕方アクセスする学問的方法の開発を目指したことを挙げ、一人称と三人称との「二項対立」の解消の可能性を希求した。だが、「人間は他者と共に生きている限り、常に、自分自身によって体験を内側から理解するか、あるいは、他者によって体験を外側から説明されるか、といった二つの可能性の中で生きている」（池田 2013: 125f）と「二項対立」の中にとどまっており、これを乗り越えることはできていない。

このように理念的には、「体験に基づけ」と「客観的であれ」という二つの命題は矛盾せざるを得ない。だが、当事者研究という立場から熊谷は、向谷地という偉大な先人の言葉を引きながら「主体」（当事者）と「客体」という「二項対立」が無効であることを暗示する。

当事者研究は、運動の中で重視されてきた「自己決定」や「自分を知っている」という状況が可能になるための前提条件にまでさかのぼって、当事者運動の思想を徹底しようとする取り組みといえる。それは当事者研究において、「自分のことは、自分がいちばん“わかりにくい”」というリアリティを共有し、「自分のことは自分だけで決めない」という原則が強調されている点からも、うかがい知ることができる。（熊谷 2020: 24）

（当事者）運動への反省と研究の進展から導き出された、このような記述は、「無知の知」によって、当事者という概念が外的な社会と接点を持たざるをえないという機微を明らかにする。これは当事者研究について社会学的に扱った檜田らによる「宣言行為が非当事者をも自動的に産出してしまうこと」と「当事者による宣言でさえも代理性や仮構性を持つこと」（檜田・小川 2021: iii）という重要な指摘とも一致する。このように、当事者研究をめぐる現実、哲学や社会学の理念的なエスノグラフィー論を乗り越え、アカデミシャンである現象学者に以下のように言わしめている。

その働きが現実存在したかどうかという、まさに研究の根本前提に関して確実でない専門家的記述よりも、現実存在する経験についてのものであるという確実性において常に勝る当事者視点の研究こそ、現象学的な学問の理念に沿っている。（池田 2013: 124）

以下では、多視点の全方位 360 度ビデオカメラを利用したフィールドワークによって得られたデータから、これまでは物理的に不可視だったがゆえに「内的地平」としてしか特定されていなかった「場」の固定によって「一人称」を「三人称」化した事例を示していく。

4 データの提示

- 1) 楽々カートを押しながら、C と R が歩いている場面
- 2) 化粧品の購入場面

4.1 「歩行」データの提示

楽々カートは基本的に把持部を掴んで歩行することが想定されているが、把持部と前腕支持台の扱い方は多様である（加戸 2025）。ここは「楽々カート」の使用歴が長い C と調査者 R との会話場面である。撮影を始めて数分後の場面で、楽々カート进行操作しながら歩いているにもかかわらず、C はカートから身体を完全に離し、ジェスチャーを伴う発話を行っている。つまり「主体」による「能動的」な行為と見されている「歩行」と「道具の使用」という点からこのデータを見ていこう。

調査者 M まだお元気ですよ
高齢者 C この家でね ゴロゴロゴロやってます



図3 メガネ型ではあるものの視点固定型の機材(EP8 というヘッドマウント型ウェアブルアクションカメラ)と多視点・全方位 360 度ビデオカメラを利用した2方向の画像。

これは、その詳細が加戸（2025: 12f）で扱われている 20 秒ほどの場面である。ここで C は 2 回カートから手を離している。1 回目は「足が悪いからね」と発話し、片手を把持部から離す（本稿では扱わない）。2 回目は「この家でね」に始まる動作であり、歩くのをやめて、「ゴロゴロゴロ」と言いながら両手を離す。この時にカートを押すようなジェスチャーを行う。その後、カートに手を置き、歩行を再開する。歩行器でもあるカートから手を離すことは、自分の身体と使用対象であるカートという道具と距離を置くことで、カートとの「歩行ユニット」としての一体性を解除することである。この時、押していたカートから手を離すことは躊躇なく行われているように見える。慣性で前方に動いていることが、自らの移動に組み込まれているように見える。そこで調査者 C と会話を続けている C は、「今ここ」にはない、普段、家の周りで使っている歩行器の動きの様子を「ゴロゴロゴロ」という擬態語を物理的な動きとカップリングして表現するために、わざわざ手を離しているように見える。

「歩行」は、単なる身体の「移動」ではなく、主体が「意図」することで行われている「能動的」なものだと考えられる。すると、この時の身体は、「意図」によって移動させられている「受動的」なものということになる。さて、この「私」は、能動的なのだろうか受動的なのだろうか。ここからも「歩行」について、これを「能動性」と「受動性」、さらには「主体」と「客体」という単純な二項対立の軸では語れないことが分かるだろう。多視点によって明らかにされる事態はさらに複雑である。この「場」では、単に「歩行」だけでなく、会話の内容に即して、発話に豊かな意味を持たせるために「カートから手を離し」ジェスチャーをするということが行われている。すなわち「今ここ」で「歩行ユニット」からカートを離脱させるという形で「楽々カート」を操ることと取り止めのない会話を続けて日常的な実践を語ることがカップリングされているのである。

ここで、「能動」と「受動」に還元できない「動き／動かされる」身体という「根源的な嵌入・相互内属性（キアズム）」とは別に、「能動性」と「意図」についての話もしておきたい。「歩く動作が可能になったとしても、それだけで歩くという行為が可能になるわけではない」（國分 2017: 16）と言えるように、すなわち「歩行」は単なる「意図」の行使ではなく、単に「歩くことさえ、『(様々な必要条件が満たされつつ)私のもとで歩行が実現されている』と表現されるべき行為であった」（國分 2017: 20）。「歩行」は、一般に「能動」であり、カートの使用はこの点を顕著なものにする。動かされた「カート」は、ある時点で体と一緒に動く「歩行ユニット」の一部になる。時には手放され、物理的には離れても、「カート」は移動体の一部であり続ける。ここで見てきたふるまいについて、結論的に言うなら、「道具を『使う』ということと、自らの身体の器官を『使う』ことには差がない。『使う』ということを通じて人は自分を認識する」（國分・熊谷 2020: 357）ということを具体的に示している事例として見ることができるだろう。こうして現れる「私」は、「毎日」や「あそこ」を繰り返して、会話という形式において他人を指向し、共にあるだけでなく、その存在において道具と分かち難い。「生きものが自己を使

用するのは、それが生きる中で、またそれが自分とは別のものとの関係に入らないうちで、そのつど自分自身の自己を利用し、自分を感じ、自分自身と近親になるという意味においてのことである。自己とは自己の使用以外の何者でもないのだ」（Agamben 2014=2016: 101f）。

4.2 化粧品の販売

販売員 S お高い商品です（つぶやくように）

高齢者 A

調査者 F 大丈夫です



図4 多視点・全方位 360 度ビデオカメラを利用した画像。

図4には、A が店員に「化粧をしてもらおう」様子とそれを見守る様々な視線の姿も明らかになっている（図4-1）。同席しているBは、購買ユニットを構成する形で化粧の指導を見守っており、また記録を取るために存在している多くの人々の視線もここには存在している。これと同時に、A がこの場で「化粧をもらった」成果を確認するため、鏡に映る自分を見ている様子（図4-2）も示しておこう。ここには購買ユニットを構成し臨席していたBが鏡を介してAに眼差しを向けている様子も写っている。

この「場」で高齢者が「化粧をする」ためには、自らに「能動的」に関心を持つこと以外に、見本となるような今風の「化粧をもらおう」ことや「化粧品の使い方を教わる」ことが必要となる。また自宅で今習ったように「化粧する」ためには、足りない「化粧品の購入」が必要になっている。先の発話は、そういったことに関わる組織化であった。参与者たちに関わる重層的な概念と、その関係性がこの映像には埋め込まれている。そして先に図1で示した中であつた、この場で撮影として行われている組織的なエスノグラフィーは、まさに「ショッピングリハビリ」によって手に入る「買い物をする楽しさ」や「化粧をする喜び」の表象を公的に作り出すために社会的に組織されているものである。

ここで販売員のSは、つぶやくように小声で「お高い商品です」と確認の報告をしている。この報告は、内容や身体の向きから、まず購入者のAに向けられているように聞こえる。「お高い」の「お」は単なる経済的な価値を超え、婉曲的にこの商品以外の商品の購入を勧めているようにも聞こえる。Aはすぐに答えることをしない。代わりにFが「大丈夫です」と答える。ここでFは、突然「購買ユニット」の一員になったように見える。

実のところ、今回のフィールドワークは、研究への協力のインセンティブとして、化粧品購入の補助を行っている。データに見られる、商品の値段についての確認にフィールドワーカーが答えるという一見変則的なコミュニケーションは、このように重層的かつ複雑な社会組織がもたらしたものであった。

図4では、誰が買い物をしているのかという「購買ユニット」（岡田1995）の拡張が見られる。これは普段行われている買い物からすれば「拡散」と呼んでも良いほどであるが、日常語で「財布の紐を握る」という表現からすると「逸脱」した活動ではない。ここでの化粧品の購買という活動は、「場」において「達成」されたものである。先に、移動を扱う中で例示された「歩行」のように、「意図」という観点から、普通は「主体的」、「能動的」に見える「買い物」や「化粧」といった行為も、一義的に能動性によるものではなく、重層的に前提条件が整えられた中で「達成」されるものなのである。このように行為者の一人称性からではなく「場」や「達成」という観点から記述を行うビデオ・エスノグラフィーは、ヴィトゲンシュタインやウィンチに範を求め「『意志』やら『意図』やらを、あくまで構文の差として、すなわち、構文のもたらす効果として捉えようとする視点」（國分2017:36）を持つと言えるだろう。今回のフィールドワークはさらにそれを映像で示すことに資するだろう。

5 結論

本稿では、ビデオを用いて行うフィールドワークとビデオ・エスノグラフィーによる記述に「ついて」の考察を行った。

フィールドワークは、地域の様々な資源を活用してリハビリの可能性を広げている「ショッピングリハビリ」事業で使われている「楽々カート」を利用する高齢者を対象に、360度ビデオカメラを駆使したものであった。

調査で利用した多視点・全方位位360度ビデオカメラの出現は「場」の複雑性をテクノロジーによって固定し研究の俎上に乗せることを可能にしてくれるかもしれない。本稿では、高齢の女性による（化粧品の）買い物やカートによる「歩行」の映像を提示して、日常生活者の活動をビデオ・グラフィーすることからえられる研究方法論上の示唆を示した。

360度ビデオカメラによる映像のデータを示して、「能動」と「受動」に還元できない「動き／動かされる」身体という「根源的な嵌入性（キアスム）」や「能動性」と「意図」について明らかにした。ここで試みたようなテクノロジーを利用して、「一人称」での「内的地平」を繰り込んで「三人称」化することは、「場」をそのままに記述することで

あり、「主体」と「客体」や「体験」と「研究による客観化」という対立を乗り越える可能性を示している。人々が社会生活を営むために利用しており、それ自体がエスノグラフィーによる記述の対象でもある「観察可能な秩序」(Garfinkel 2002; Livingston 2008)を解明するというのが、エスノメソドロロジーの採用している研究手順であった。そして、この研究の手順こそが「体験をそのまま研究する」というハイデガーの希望を現実のものにしてくれると言えるのではないだろうか。

付記

本研究は JSPS 科研費 JP23K17573, JP25K05528 の助成を受けたものである。

参考文献

- Agamben, G. 2014, *L'uso dei corpi*. (上村忠男訳, 2016, 『身体の使用——脱構成的可能態の理論のために』みすず書房.)
- Eisenmann, C. & M. Lynch, 2021, “Introduction to Harold Garfinkel’s Ethnomethodological “Misreading” of Aron Gurwitsch on the Phenomenal Field”, *Human Science*, 44(1): 1-17.
- Garfinkel, H., 1967, “Practical Sociological Reasoning,” In Max Travers and Manzo J. F. (eds.), *Law in Action*, Ashgate Publishing, 99-117. (岡田光弘訳, 2025, 「実践的な社会学が行なっている推論と理由づけ」『法のエスノメソドロロジー』新曜社, 25-45.)
- Garfinkel, H., 2002, *Ethnomethodology’s Program*, Rowman & Littlefield.
- 堀田裕子, 2025, 「衣服の買い物行動のもつ豊饒性——「変じゃないですか？」をめぐる相互行為分析」『現象と秩序』(23): 51-72.
- 池田喬, 2013, 「研究とは何か, 当事者とは何か」石原孝二編『当事者研究の研究』医学書院.
- 池谷のぞみ, 2021, 「現象学にインスピレーションを受けたエスノメソドロロジーの可能性」日本現象学・社会科学会『現象学と社会科学』(4): 25-42.
- 石原孝二編, 2013, 『当事者研究の研究』医学書院.
- 石原孝二, 2013, 「当事者研究とは何か——その理念と展開」石原孝二編『当事者研究の研究』医学書院.
- 加戸友佳子, 2025, 「新しい道具への習熟が意味すること——ショッピングリハビリにおける『楽々カート』を例に」『現象と秩序』(23): 3-20.
- 樫田美雄・小川伸彦編著, 2021, 『〈当事者宣言〉の社会学——言葉とカテゴリー』東信堂.
- 國分功一郎, 2017, 『中動態の世界——意志と責任の考古学』医学書院.
- 國分功一郎・熊谷晋一郎, 2020, 『〈責任〉の生成——中動態と当事者研究』新曜社.
- 熊谷晋一郎, 2020, 『当事者研究——等身大の〈わたし〉の発見と回復』岩波書店.
- Livingston, E. 2008, *Ethnography of Reason*, Ashgate.

- 真鍋陸太郎, 2025, 「新しい機材を活用したビデオ・エスノグラフィーの 研究の可能性——360 度全方位ビデオカメラやヘッドマウント型ウェアラブルカメラを用いた実践を通じての検討」『現象と秩序』(23): 21-34.
- McIlvenny, P. 2018, “Inhabiting Spatial Video and Audio Data: Towards a Scenographic Turn in the Analysis of Social Interaction”, *Social Interaction: Video-Based Studies of Human Sociality*, 2(1).
- McIlvenny, P. & Davidsen, J. 2017, A Big Video Manifesto: Re-sensing Video and Audio, *Nordicom Information*, 39(2): 15-21.
- McIlvenny, P. & Davidsen, J. 2023, Beyond Video: Using Practice-based VolCap Analysis to Understand Analytical Practices Volumetrically. *Ethnomethodological Conversation Analysis in Motion*, 221-44.
- 岡田光弘, 1995, 「相互行為場面における身体とカテゴリー——身体の社会学としての購買場面のエスノメソドロジ的相互行為分析」『Sociology Today』(6): 27-38.
- 岡田光弘, 2001, 「構築主義とエスノメソドロジー研究のロジック」中河伸俊・北澤毅・土井隆義編『構築主義のスペクトラム』ナカニシヤ出版, 26-42.
- 岡田光弘, 2019, 「『社会学 1.0』『社会学 2.0』vs.『社会学 0.0』『社会学 1.5』——ウィンチェンシュタイン派の「観察社会学」という観点から」『新社会学研究』(4): 69-81.
- Raudaskoski, P. 2023, “360-cameras used by a team participating in a mobile gathering,” *Ethnomethodological Conversation Analysis in Motion*, London: Routledge (Amazon Kindle).
- 斎藤環, 2024, 『イルカと否定進学——対話ごときでなぜ回復が起こるのか』医学書院.
- Schutz, A., 1963, “Some leading Concepts of Phenomenology”, In Maurice Natanson ed., *Collected Papers I*. Martinus Nijhoff, 99-117. (渡部光・那須壽・西原和久訳, 1983, 「現象学のいくつかの主要概念」『アルフレッド・シュッツ著作第1巻 社会的現実の問題 [I]』マルジュ社, 175-98.)
- Sharrock, W. W. & Anderson, R. J., 1980, “On the demise of the native: Some observations on and a proposal for ethnography”, *Occasional Paper no.5. Department of Sociology*, University of Manchester.
- Van Maanen, J., 1988, *Tales from the Field: On Writing Ethnography*. (森川渉訳, 1999, 『フィールドワークの物語』現代書館.)
- ウィキメディア・コモンズ, 2006, 「File:Ernst Mach Inner perspective.jpg」(2025 年 9 月 9 日取得, https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Ernst_Mach_Inner_perspective.jpg) .

【編集後記】『現象と秩序』第23号をお届けします。

今号では複数の論文（加戸論文，真鍋論文，岡田論文）に360度全方位ビデオカメラが出てきます。360度全方位カメラは，岡田（38頁）が言うように「多視点カメラ」です。すなわちソフト的な操作によって，事後的に視点を自由に設定した2次元動画を創り出せます。360度ビデオカメラを複数台用いた調査データなら，少なくとも視覚的環境に関しては，環境全部をまるごと保存したデータであるといえるでしょう。しかし，この「まるごとさ」は調査にとって朗報でしょうか。簡単にはそうとは言えないと思います。それは，ビデオカメラの「画角」が「視野範囲類似的志向性」を失ったことによる困難を我々は無視できないからです。じつは，これまでのビデオデータを用いた研究は，自覚しない形で，この「視野範囲類似的志向性」を活用して研究をしていました。我々の眼は，世界を視野的に切り取る働きをしていて，そこに，志向性の根拠も，視線を向けられたことに対する反応の根拠もあったのですが，ビデオカメラがとらえた映像を分析する際にも，我々は，人間の眼の働きにおいて有意義化していた諸概念を，ほぼそのまま流用していたのです。これまでのような野郎図的な流用は今後はもうできないかもしれない……。これは，ビデオを利用した人文・社会科学の危機です。しかし，この現在の危機的状況には解放の側面もあるかも知れないということ，岡田論文は訴えています。じつは，他の論文（堀田論文，藪本論文，松浦論文）も，見る／見られることにかかわる論文です。普通の障害経験の語りとは違う位相から「ろう者の語り」を分析した飯田論文同様，本号には，我々が世界を知るためにどのように感覚的常識を生きたり，生きなかつたりするべきか，に関して示唆的な論文が集まっています。本号もどうぞお楽しみ下さい。なお，本号掲載の特集は，ショッピングリハビリ共同研究（科研費23K17573）の成果の一部です。ファンド提供者に記して感謝します。（Y.K.）

『現象と秩序』編集委員会（2025年度）

編集委員会委員長：堀田裕子（摂南大学）

編集委員：樫田美雄（摂南大学），飯田奈美子（関西外国語大学），加戸友佳子（摂南大学）

編集協力：村中淑子（桃山学院大学）

編集幹事：大江勇輝（京都産業大学）

『現象と秩序』第23号 2025年10月31日発行

発行所 〒572-8508 大阪府寝屋川市池田中町17-8

摂南大学 現代社会学部 樫田研究室内 現象と秩序企画編集室

電話・FAX：072-800-5389（樫田研），e-mail：kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN：2188-9848， ONLINE ISSN：2188-9856

<https://gensho-kashidayoshio.sakuraweb.com/> （←昨年から新サイトになりました）
